

Title	露語初級文法覚書
Author(s)	山口, 巖
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 (1998): 84-92
Issue Date	1998-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/65833">http://hdl.handle.net/2433/65833</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 露語初級文法覚書<sup>1</sup>

### はじめに

ロシア語の学習を志すものにとって、先ず手にしなければならないものは、いうまでもなく入門書である。本邦に於いては従来八杉先生の名著が知られているが、このような初歩の文法書が次々と世に問われるに至ったのは比較的近年の現象であり、斯学の隆盛を象徴するものとして、誠に慶ばしいことである。このような傾向は、私にとっても、特別な意味をもっていた。複数の文法書の出現はこれらの文法書相互の比較を可能ならしめ、しかも、そこに看取される叙述或いは教材の異同が、単なる技術的な平面に於いて処理する可きものでなく、ロシア語へのアプローチの態度、言語観といった原則的なものと深く関わりあっていることに気づいたからである。このことは、我々にとって「初歩的」なものであり、既に自明と思われている事柄についても、再度深く省る機会を与えて呉れるものであった。

ここでは、このような反省の上に、「初歩的」な文法現象について若干気のついた事を羅列してみたいと思う。従って、叙述全体に体系性が存在するというようなものではない。

### I. e/oの交替とウムラウトëについて

ロシア語においては周知のように硬母音と軟母音の相対立する二系列がある。これは形態論の面において重大な意義を有して居り、厳密には *morphophonologique* な対立であるが、音声学的にも軟母音は [j] を第一要素とする複合音であり、а-я [ja], у-ю [ju] のように [j] を有しない硬母音と対応している。

しかし乍ら o : e ([o] : [je]) の対立のみは音声学的には質の対立 [o] : [e] をも含み、著るしく系の斉一性を損なっている。音声学的に言うならば [o] に対立する軟母音は [jo] (ë と書かれる) であり、[je] に対立する硬母音は [e] (э と書かれる) でなければならないからである。今活字の都合を考えて e [je] を e, э を E, ъ を ë, e の長音及び短音を示す場合には ē および e, ë [jo] は ë と転写する事にする。

このうち E はスズネフスキーによれば既に十四世紀にその用例が見出されるというが、主として外来音を写す必要から用いられるものであって、比較的新しいものである。ロシア語本来の語では、Etot、俗語 Etak 等の極めて限られた語彙に用いられるに過ぎず、それも強調が本来の機能であったと考えられる (cf. A. Vaillant, *Grammaire comparée des langues slaves*, t. 2, part. 2, p. 388)。したがってこれは形態論的には、何等の意義

<sup>1</sup> 『水門』 6号 昭和40(1965)年1月 1-10頁。

をも有していない。

o と e の交替はスラヴ共通語期に  $i_o > e$  の変化が生じたことに起因するとされている (cf. A. Vaillant, *op. cit.*, p. 109)。例えば \*město-m > město : \*morjo-m > more。

しかし乍ら、これは必ずしも単純な過程をたどって生じたものではないように思われる。語末において \*nebhos > nebo, \*kleuos > slovo のように \*-os は -o となったが、男性名詞 o 語幹 -os は  $u$  となった。逆に \*-on は sl.  $tu$ , lit.  $tą$ , gr.  $tón$  のように  $-u$  を生ずべきであるにも拘らず、中性 \*-on は -o となった。同様にして \* $i_o$ s >  $ji$ , \* $i_o$ n >  $je$  が生じた。諸家はここから中性 -o は男性名詞との混同を避ける為に、代名詞中性 \*-od >  $o$  を借用したと説明しているが、何れにもせよここには音韻法則に抗して異った結果を生み出そうとする言語の「主体的」な運動が看取されるのである。

この外、e には勿論印欧語本来の、\*e に来源を有するものもあった。例えば sl. berete, gr. phérete, skr. bháratha, got. bairip (A. Meillet, *Le slave commun*, Paris 1934, p. 48) がこれである。又後には印欧語の  $i$  > sl.  $i$ 、即ち所謂 jery (ь) に来源を有するものがこれに加わって来る。

以上に加えて現代ロシア語においては  $e$  と e の混同が行われた結果 e には  $e$  に来源を有するものも含まれている。 $e$  は i.e. \* $e$ 、及び \*-oi, \*-ai に来由するものである。

例えば

- \* $e$  : lat. semen, lit. sémens, lett. sēt, sl. sěmę  
 \*ai : lat. laevus, gr. laiwós, sl. levu; gr. daēr <  
 (\*daiwēr), lat. lēvir (< laevir), lit. dieveris,  
 sl. dēverī  
 \*oi : gr. loipós, lit. āt-laikas, sl. otu-lěku  
 gr. wōida, got. wait, v.sl. vědě

この  $e$  は、メイエも指摘しているように、アクセントをとっても  $e$  にはならないが (A. Meillet, *op. cit.*, p. 152 & seq.)、これが語尾に用いられている場合について、若干検討してみよう。

先ず  $e$  を使用するものとして、男性及び中性 o 語幹名詞の所格(前置格)単数がある。これは幹形成母音 -o- に所格の語尾 -i- を加えて成った \*-oi に来由している (A. Vaillant, *op. cit.*, t. 2, part. 1, p. 30)。これに対応する軟語尾は \* $i_o$  >  $ji$  であるはず (cf. sl. \*mož- $i_o$  : moži) であるが、ロシア語では硬語尾の  $e$  が一般化した (A. Vaillant, *op. cit.*, t. 1, part. 1, p. 51)。

古い u 語幹の単数所格 -u (e.g. synu) が  $e$  に代置されたのは、歴史時代に入ってからであるが、これも o 語幹名詞からの借用にすぎない。

A 語幹所格単数は \* $\bar{a}$  + \*i > \* $\bar{a}i$  (cf. lat. Romae < Romai) >  $e$  であり、軟語尾は \* $\bar{a}i$  >  $ji$  であるが (cf. glavě : duši)、ロシア語では硬語尾が一般化した (A. Vaillant,

op. cit., t. 2, part. 2, p. 79 & seq.).

与格単数の場合も同様である。 $*\bar{a} + *ei > *\bar{ai}$  (gr. -āi, ēi, skr. -ai)  $> \bar{e}$ ,  $*\bar{iai} > \bar{ii}$ 。この  $\bar{ii}$  も  $\bar{e}$  に代置された。

これに対して代名詞の場合は  $\bar{ii}$  の  $\bar{e}$  による置換は行われず、 $\bar{e}/i$  の交替が保存された。

例えば指示代名詞  $t\bar{u}$  (複数生格  $*toišon > t\bar{e}x\bar{u}$ , 所格  $*toišu > t\bar{e}x\bar{u}$ , 造格  $*toimis > t\bar{e}mi$ , 与格  $*toi-mus > *t\bar{e}m\bar{u}$ ) に対して  $našix\bar{u}$ ,  $našim\bar{u}$ ,  $našim\bar{i}$  etc.

これらの  $\bar{e}$  は後舌母音を第一要素とする二重母音  $*ai$ ,  $*oi$  から発生したものであるから硬子音と結合するを得たのであり、いわば「硬子音」の  $\bar{e}$  とでもいうべきものであるが、スラヴ語においては、「軟母音」の  $\bar{e}$  というべきものも存在している。

その一は  $-ja > \bar{e}$  の変化によって生じたものであって、 $a$  と対立している。例えば A 語幹名詞  $glava$  に対して、 $zempl\bar{e}$ 。この  $\bar{e}$  はやがて  $-ja$  に変化し、本来の交替の斉一性を回復した。同様にして複数与格  $zempl\bar{e}m\bar{u} \rightarrow zemljam\bar{u}$ 、造格  $zempl\bar{e}mi \rightarrow zemljami$ 、所格  $zempl\bar{e}x\bar{u} \rightarrow zemljax\bar{u}$  etc.

その二は  $*-jons > \bar{e}$  の変化によるものである。 $*-ons$  はスラヴ語全体にわたって  $-y$  となった (複数対格  $bogy$ , pr.  $deiwans$ , lit.  $diev\bar{u}s$ ) のに対し、 $*-jons$  はスラヴ語南方群では  $e$ 、北方群では  $\bar{e}$  となった。例えば南方群に属する古スラヴ語  $m\bar{o}ž\bar{e}$  に対し北方群に属するロシア語は  $muž\bar{e}$  ( $< *mongjons$ ) が対応する。

これと完全に並行しているのは、 $*-\bar{ans} > y$ :  $*-j\bar{ans} > e$  (南方群)、 $\bar{e}$  (北方群) の場合である。例えば  $glavy$  に対して sl.  $duš\bar{e}$ , r.  $duš\bar{e} < *dheusjans$ 。

以上の二つは共に  $-i$  に依って代替せられ、硬語尾  $-y$  に対して斉一的な対応を回復した。

印欧語の  $*e$  に来由するものは、その本性からして「軟母音」の  $\bar{e}$  であるが、これは語尾に現われない。

これらをまとめると次のようになる。

$$\begin{array}{rcl} \bar{e} & - & i \quad \nearrow \quad \bar{e} - \bar{e} \rightarrow e - e \text{ (名詞)} \\ & & \searrow \quad \bar{e} - i \rightarrow e - i \text{ (代名詞)} \\ a & - & \bar{e} \rightarrow a - ja \\ y & - & \bar{e} \rightarrow y - i \end{array}$$

以上から明らかなように、軟母音  $\bar{e}$  は何れも消滅し、「硬母音」の  $\bar{e}$  のみが一般化したのである。一方印欧語の  $e$  に来源を有するものは、古くから前舌母音であり、従って硬母音の結合する事はない。また  $-io > e$  の変化に依って生じた  $e$  も、その成立からして常に「軟母音」の  $e$  であると考えられるから、現代ロシア語においては、硬子音と結合する  $e$  及びこれと対応する  $e$  (e.g.  $stol\bar{e}$ :  $prij\bar{a}te\bar{e}$ ) は、語源を考えるまでもなく、 $\bar{e}$  に来由すると判定することを得る。

$\bar{e}$  は歴史的に  $e$  から発生したものであって、初めは「本来的に」軟い子音の後に立ち語末あるいは硬母音に先行する位置に於いて、変化が生じた。例えば  $\bar{s}\bar{e}pot < \bar{s}opot$ ,  $\bar{z}\bar{e}ny$ ,

černyj 等がこれである。(即ち š, ž, č, c, j + e + 硬子音)。やがてこれが「位置によって」軟い子音のあとにも生じるようになった。例えば sēstry, léd, ozěra 等。この変化は諸家によって認められているように、オーカニエ (即ちアクセントを有しない o を [o] と発音する現象) を有する方言においては、例えば, sěló, pěkú のように、アクセントを有するか否かに拘らず行われたのに反し、アーカニエ (アクセントを有しない o を [a] と発音する現象) を有する方言、並びにこれに属する標準語においては、アクセントを有する場合には限られていた。これは、ヴァイアン等の主張するように、アーカニエを有する場合には、アクセントのない位置では o の音声が存在しないことによるのであろう。

このような条件を満たした場合 e > ě の変化は例外なく行われたと考えられるが、現代ロシア語に於いては、結果は必ずしも単純ではない。

例えば tětja, nesěte, na berěze のように軟子音の前においても ě が認められる場合がある。チェルヌイフ等はこれを tětka, nesět, berěza 等の形態論的類推によるものであると説明している (П. Я. Черных, *Историческая грамматика русского языка*, М. 1954, p. 129)。

逆に ščélka, čéstnyj 等は、夫々 ščél', čést' の類推に依って、e とはならなかった (*ibid.*)。

また č, š, ž はやがて「硬音化」するが、ě の場合はこの硬音化が極めて遅く、e > ě の変化が既に完了していた為、この子音の前では ě が認められない。これに反し š, ž の場合硬音化は比較的早く、大部分は ě に移行するが、なお *proměž, češet* のように、e > ě の変化の認められないものも存在し、その条件を定めるのは困難である。

更に教会スラヴ語その他の借用語の場合、この変化は生じない。教会スラヴ語起源の語はアルカイズム、あるいは雅語と感じられるところから、e > ě の変化の欠如は「高い文体」に属する語と感じられる傾きを示すようになる。即ち文体論的な効果を有するようになるのである。よく引用されるように、プーシキン等にこの実例はしばしば見出される。例えば *Gljažu l' na dub uedinnennyj (Perezivět moj vek zabvennyj); Na xolmax puški, prismirev, / Prervali svoj golodnyj rev; I posmeját'sja koj o čem (... meždu tem,)* 等 (cf. Черных, *op. cit.*, p. 131)。

このような文体的な使用はしばらく措くとしても、以上述べた事からすれば、e/ě の交替について、共時的な立場から、何等かの法則を見出すことは、殆ど不可能に近い事であるようにも、思われる。

しかし乍ら今問題を語尾に限定すれば、事情が余程変わってくると思われる (問題を語尾に局限する事は、硬軟両母音の対応が正書法の場合を除外すれば、「文法的」な対応であるという事によって十分な根拠を有している。語幹においては硬軟両母音は若干の特殊な場合を除いて規則的な対応を示さないばかりでなく、語彙論の範疇に属するものと考えられるからである)。

語尾と語幹を区別することによって、先ず外来語の影響を除外する事ができる。ロシア語に於いては、例えば英語における *focus-foci, datum-data, oasis-oases* の如き所謂

foreign declention は存在しないからである。また所謂「出沒母音」beglyj zvuk も、語尾と密接な連関を有しはするが、語幹内部の所謂 internal change として一応除外することを得る。

以上の限定をつけた上で、 $e > \ddot{e}$  の変化を考察すれば、そこに極めて興味ある傾向が存在する事に気付く。 $e / \ddot{e}$  の対立は  $o / e$  の対立と極めて密接な連関を有しているのである。

ロシア語の中性名詞主・対格における  $o / e$  の対立をもたらした  $*-om > o$ ,  $*-jom > e$  の変化が必ずしも単純な音韻の変化によって招来せられたものではない事は、既に述べた通りである。このことは、他の場合に於ける  $o / e$  の対立に関しても、言うことができる。

以下若干これについて述べてみよう。

○ 語幹男性及び中性名詞単数造格の語尾は、 $-omi$  であり、南方群ではこの語尾が継承されたが、ロシア語では U 語幹名詞と混同され、 $-umi$  が一般化し、やがて  $-om$  となった。同様に軟変化名詞の場合にも、ロシア語では I 語幹と混同され、その語尾  $imi > em$  が一般化した。

複数生格においては U 語幹名詞の語尾  $-ovu < *-ouon$  が O 語幹に一般化した (『ロシア文学会会報』第7号 昭和39(1964)年所載拙稿参照)。軟語幹  $-ju-$  はスラヴ語では消滅した (cf. lit. karālius) が、その語尾  $-(i)evu$  は、母音幹の男性名詞に残っている (e.g. tramvájev)。

これに対し、子音幹男性名詞に広く一般化している  $-ej$  は I 語幹名詞の複数生格  $sl. -ii < *-jij < *-ij-ou$  の借用によるものであり、従って  $-ov/-ev$  とは異って  $-ej$  は対応する硬語尾を有していない。

A 語幹名詞の単数造格は、代名詞の変化語尾の借用と言われ (A. Vaillant, op. cit., t. 2, part. 1, p. 82) るが、これは女性語幹  $*-aj-$  に造格語尾  $*-ān$  を加えたもの  $*-ajān > -ojp > oju(-oj)$  である。これに対する軟語尾は  $*-(i)aj-ān > ej$  である。

形容詞長語尾の場合は、スラヴ語と最も近い親近関係を有するリトワニア語において短語尾形男・短・主  $gēras$ , 対  $gēra$ , 生  $gēro$  etc. に対して長語尾形は夫々  $gerāsis$ ,  $gērajī$ ,  $gērojo$  というように、短語尾形に  $jis$  を加えて成ったものである事が、極めて透明な形で見出されているところから、スラヴ語においても、同様の手続きによって、長語尾形が成立したと考えられている。細部にわたっては、未だ充分に明らかでない点もあるが、この考えは正しいものであると思われる。

この仮定に従えば、男・中性単数形の場合は、硬変化は  $nova-jego > novogo$ 、軟変化は  $gorinja-jego > gornego$  というように、縮約によって  $o/e$  が成立する。同様に与  $-u-jemu > -omu$ :  $-ju-jemu > emu$ 、所  $-ē-jemj > -om$ :  $-i-jemj > -em$ 、中・主  $-o-je > oe$ :  $-e-je > -ee$ 、女・生  $-y-ję > -oj$ :  $-i-ję > -ej$ 、所  $-ē-i > -oj$ :  $-ji-i > -ej$ 、与  $-ē-i > -oj$ :  $-ji-i > -ej$  というようになる。

これらを通覧すれば、このような縮約は、必ずしも純粋に音声学的見地からのみなされたものではないことは、明らかであろう。一般にロシア語においては、 $o$  及び  $e$  は、その

来源に拘らず、互に相對立するものとして、体系化されようとする、所謂 Systemzwang が極めて強いと思われるのである。

アクセントの下において e が ě となる現象も、この o/e の対立の下に、自己を体系化しようとしていると見られる。即ち o/e の対立の存在する場合、その対立の一方である e はアクセントをとれば ě となるのである。若しこのような対立が存在しない場合 e はその来源に拘らず ě とはならない。o/e の対立を構成しない複数生格語尾 -ej が、アクセントをとっても ě とはならない ě に起源を有するものではなく、理論的に ě となり得る筈であるにも拘らず -ej に留まっているのも、正にこの故と考えられよう。これに対し o/e の対立を有する女性単数造格の -ej は、アクセントをとれば自動的に -ěj となる (e.g. zemlěj : ženoj)。

以上からアクセントをとって ě となりうるものを  $e_1$ 、なり得ないものを  $e_2$  とすれば、硬軟両母音に対応表において

硬母音	a	.....	o	$e_2$	.....
軟母音	ja	.....	$e_1$	$e_2$	.....

となる修正を施すことが必要であるように思われる。かくする事に依って何等語源的知識を有しない初学者といえども、何れの格形がアクセントをとって ě となるかを直ちに知ることができる。これを仮に「ウムラウトの法則」と呼ぶことにする。

## II. š, ž, č, šč 及び c の硬軟について

これは š と ž, č と šč 及び c に分たれる。

š と ž は現代ロシア語に於いては硬子音に属すると言われている。(АН СССР, *Грамматика русского языка*, 1960, т. 1, р. 52. Согласные ж, ш, ц, являются в русском литературном языке твердыми.....)。これらの š 及び ž (及び c) が何故硬子音と見なされるかについての根拠は明らかにされていないが、他の所で例えば「軟音 š' 及び ž' はロシア語では長子音 š'š' 及び ž'ž' としてのみ存在しうる」とあり、この発音に際しては舌尖が反転しない(即ち retroflex でない)と説明されている (op. cit., p. 65) こと、並びに例として šči, ščedryj, ščėki etc. が挙げられている (šč はモスクワ発音では [ʃ] である) ことからすれば、専らその発音、即ち音声学的性質に依ってであると推断される。「軟い」ž'ž' と「硬い」žž' 間の動揺が見られる事を挙げ、vož'ž'i あるいは vožžy の両用の発音が存在すると述べている (op. cit., p. 50) こともこれと符合する。c の場合も同様にして専らその音声学的特質によって硬子音と断じられているのである。

šč 及び č が軟子音に属するというのも、ほぼ同様の根拠に依る。

しかるに š, ž を語幹末の子音とする名詞及び形容詞は、その変化形式において、šč, č を語幹末の子音とする場合と同様に、明らかなる軟変化の徴条を示している。例えば、

単主	pljáz	kryš-a	lóz-e
生	a	i	a
与	u	e	u
対		u	e
造	em	ej	em
前	e	e	e
複主	i	i	a
生	ej		
与	am	am	am
対	i	i	a
造	ami	ami	ami
前	ax	ax	ax

形容詞の場合も同様に、例えば *svéz-ij*, *-ego*, *-emu*, *-ij*, *-im*, *-em*, *-ee*, *-ej* etc.

語尾の *-u*, *-a* 等は本来 *ju*, *ja* であると考えられる (cf. *infra* 正字法規則) から、これらは完全なる軟変化であり、*š*, *ž* もまた軟子音とせねばならない。これを硬子音に属せしめるのは、音韻体系と音声学的事実 (*non-palatalized*) という二つの相異なる次元の混同であると思われてならない。音韻体系としての硬軟と、その音韻の実現である音声の硬軟との間に食い違いのある著るしい例であると考えられるのである。

*c* の場合は *y* と結合するという点で上述の四箇の音韻と異っているが、その変化形式を見れば、やはり軟子音と考えないわけにはいかない。

以上から上顎音は音韻として何れも軟子音であるべきである。

歴史的にこれらの子音は何れも本来「軟い」子音であり、後に「硬子音化」したのであるが、このような二次的な「硬音化」の故に、形態論的に未だ「軟子音」として取扱われるとして、いささかも不自然ではない。実際若干の場合には、例えば *graběž* のように、*ž* が音韻として硬子音と見なされるべき例も若干は見出される (*e > ě* は軟子音 + *e* + 硬子音の場合にのみ認められるのが原則である) が、未だ散発的であって、充分強力なものではない。

### III. 正字法規則について

ロシア語の正字法規則は、顎音 *g*, *k*, *x* 及び上顎音 *ž*, *š*, *č*, *šč* は *y*, *ja*, *ju* と結合する事ができず、これを夫々 *i*, *a*, *u* に変えることになっている。

しかし乍ら、上顎音の場合、以上に加えて *ě* → *o*, *i* → *y* をこの規則に加えるべきであると考えられる。このようにすれば、正字法の規則は次のようになる。



喉音	g, k, x	y, ja, ju	→	i, a, u
上顎音	š, ž, č, šč	y, ja, ju, ě	→	i, a, u, o
上顎音	c	i, ja, ju, ě	→	y, a, u, o

このことの有する意味は、上述のウムラウトの規則と合せて、従来の所謂混合変化を正則の軟変化から説明しうる事である。例えば、

nož	nož-í
nož-á < -já	nož-ěj
nož-ú < -ju	nož-ám < -jám
nož	nož-í
nož-óm < -ëm < -é <sub>1</sub> m	nož-ámi < -jámi
nož-é < -é <sub>2</sub>	nož-áx < -jáx
bol's-ój	bol's-ój < -ěj < -é <sub>1</sub> j
bol's-ógo < -ëgo < -é <sub>1</sub> go	bol's-óju < -ëju < -é <sub>1</sub> ju
bol's-ómu < -ëmu < -é <sub>1</sub> mu	
	xoroš-ó < -ë < -é <sub>1</sub>
bol's-óm < -ëm < -é <sub>1</sub> m	

c の場合は

otec	otcý
otc-á < -já	*otc-óv < -ëv < é <sub>1</sub> v
otc-ú < -jú	otcám < -jám
otc-á < -já	otc-óv < -ëv < -é <sub>1</sub> v
otc-óm < -ëm < -é <sub>1</sub> m	otc-ámi < -jámi
otc-é	otc-áx < -jáx

cf. pálec, pál'cem, pál'cev

及び

kuc-yj < -ij	kuc-ee	kuc-aja < -jaja	kuc-ye < -ie
kuc-ego		kuc-ej	kuc-yx < -ix
kuc-emu		kuc-ej	kuc-ym < -im
kuc-yj < -ij	kuc-ee	kuc-uju < -juju	kuc-ye < -ie
kuc-ym < -im		kuc-eju	kuc-yimi < -imi
kuc-em		kuc-ej	kuc-yx < -ix

即ち以上のような修正を正字法規則に加える事によって、名詞、形容詞の全般にわたって存在する所謂混合変化を正則の軟変化語尾から推定することを可能ならしめ、初学者にとっては特に煩雑なこの種の変化を事実上除去することができると思われるのである。